

10ミナのたとえ

ルカ福音書19:11-27 (新改訳2017訳)

19:11 人々がこれらのことばに耳を傾けていたとき、イエスは続けて一つのたとえを話された。イエスがエルサレムの近くに来ていて、人々が神の国がすぐに現れると思っていたからである。

19:12 イエスはこう言われた。「ある身分の高い人が遠い国に行った。王位を授かって戻って来るためであった。」

19:13 彼はしもべを十人呼んで、彼らに十ミナを与え、『私が帰って来るまで、これで商売をきなさい』と言った。

19:14 一方、その国の人々は彼を憎んでいたの、彼の後に使者を送り、『この人が私たちの王になるのを、私たちは望んでいません』と伝えた。

19:15 さて、彼は王位を授かって帰って来ると、金を与えておいたしもべたちを呼び出すように命じた。彼らがどんな商売をしたかを知ろうと思ったのである。

19:16 最初のしもべが進み出て言った。『ご主人様、あなた様の一ミナで十ミナをもうけました。』

19:17 主人は彼に言った。『よくやった。良いしもべだ。おまえはほんの小さなことにも忠実だったから、十の町を支配する者になりなさい。』

19:18 二番目のしもべが来て言った。『ご主人様、あなた様の一ミナで五ミナをもうけました。』

19:19 主人は彼にも言った。『おまえも五つの町を治めなさい。』

19:20 また別のしもべが来て言った。『ご主人様、ご覧ください。あなた様の一ミナがございます。私は布に包んで、しまっておきました。』

19:21 あなた様は預けなかったものを取り立て、蒔かなかったものを刈り取られる厳しい方ですから、怖かったです。』

19:22 主人はそのしもべに言った。『悪いしもべだ。私はおまえのことばによって、おまえをさばこう。おまえは、私が厳しい人間で、預けなかったものを取り立て、蒔かなかったものを刈り取ると、分かっていたというのか。』

19:23 それなら、どうして私の金を銀行に預けておかなかったのか。そうしておけば、私が帰って来たとき、それを利息と一緒に受け取れたのに。』

19:24 そして、そばに立っていた者たちに言った。『その一ミナをこの者から取り上げて、十ミナ持っている者に与えなさい。』

19:25 すると彼らは、『ご主人様、あの人はすでに十ミナ持っています』と言った。

19:26 彼は言った。『おまえたちに言うが、だれでも持っている者はさらに与えられ、持っていない者からは、持っている物までも取り上げられるのだ。』

19:27 またさらに、私が王になるのを望まなかったあの敵どもは、ここに連れて来て、私の目の前で打ち殺せ。』

【祈りながら考えよう】

- (1) 神の国はいつ現れるのですか。人々はどう誤解していましたか。
- (2) 私たちキリスト者全員に預けられている1ミナとはどんなものですか。
- (3) 三番目のしもべの問題点は何ですか。どうすべきでしたか。

【解説】

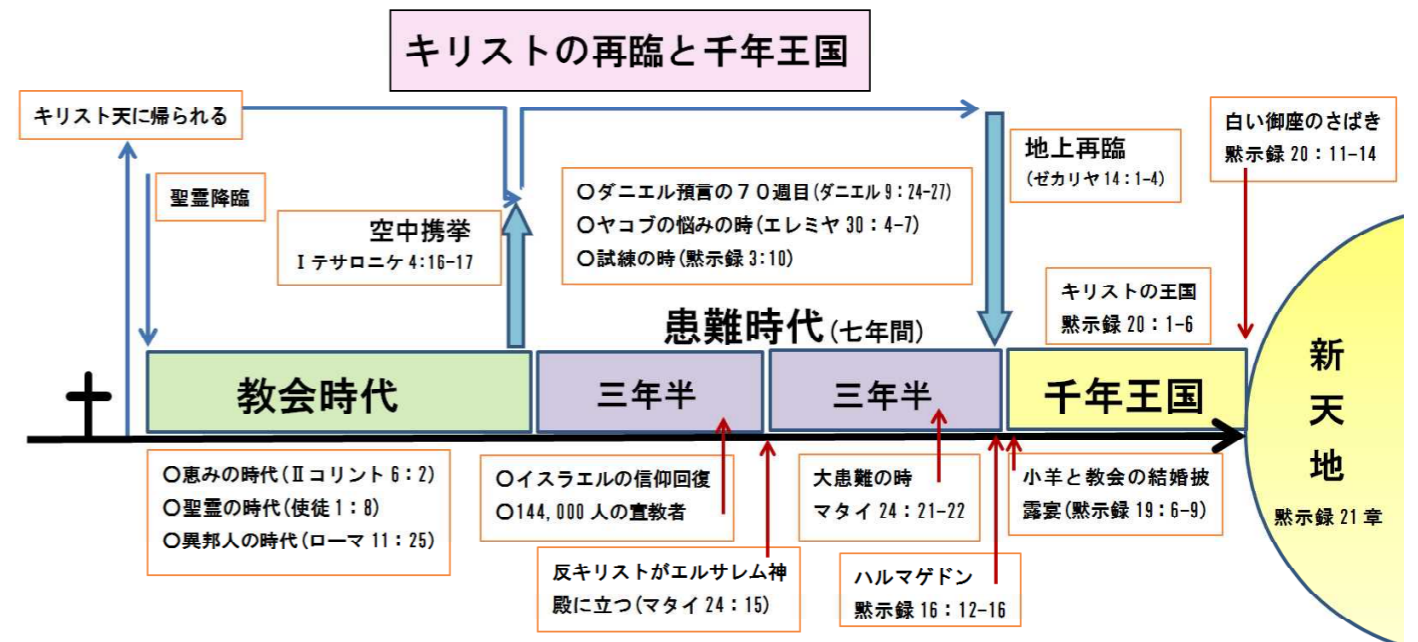
(1) 神の国がすぐに現れると思っていた

《人々がこれらのことばに耳を傾けていたとき、イエスは続けて一つのたとえを話された。イエスがエルサレムの近くに来ていて、人々が神の国がすぐに現れると思っていたからである。》

救い主がエリコから《エルサレム》に近づかれた頃、主に従う者たちの多くは《神の国がすぐにでも現れるように思

っていた》。主は10ミナの《たとえ》によって、彼らのそのような誤解を解かれた。主は、「主の初臨と再臨の間には時間的な隔りがあり、その間、弟子たちは主のために忙しく働くことになる」ということを明らかにされた。

これから主イエスはエルサレムに行かれるが、その時、すぐ神の国が実現するのではなく、主イエスは十字架に掛かって殺され、三日目に復活し、その後昇天し、それからしばらくしないと再臨されない。神の国(千年王国)が実現するのは、地上再臨の時なのである。だから、それまでにしなければならないことが主の弟子たちにはある。



(2) 私が帰って来るまで、これで商売をきなさい

《イエスはこう言われた。「ある身分の高い人が遠い国に行った。王位を授かって戻って来るためであった。彼はしもべを十人呼んで、彼らに十ミナを与え、『私が帰って来るまで、これで商売をきなさい』と言った。》

この《身分の高い人》についてのたとえは、ヘロデ大王の息子アケラオの人生で実際に起こったことと類似点がある。彼はヘロデによって後継者に選ばれたが、民から拒絶された。彼は自分が王位継承者であることを認めてもらうためにローマへ行き、それから戻って来て、自分のしもべたちには報い、敵たちを滅ぼしたのである。

このたとえでは、主イエスご自身が《ある身分の高い人》である。天に行かれたお方、地上に戻って来て、ご自分の御国を打ち立てる時を待っておられるお方である。

《10人のしもべ》は主の弟子たちを表している。主は各自に1ミナずつ与え、「わたしが再び来る時まで、そのミナで《商売をきなさい》と彼らに命じられた。主のしもべの能力や才能には違いがあるが(マタイ25:14-30のタラントのたとえを参照)、だれもが共通に持っているものもある。たとえば、福音伝道、この世でキリストを代表する特権、祈る特権などである。ミナはこれらのことを物語っているのだろう。

原語では、一人1ミナずつ渡されたと記されている。1ミナというのは、ギリシャの貨幣で、これをローマの貨幣に直すと百デナリとなる。1デナリは、労働者の1日分の給与に当たるから、百デナリと言え、4ヶ月分の給与になる。これは、私たちキリスト者に預けられているものを表している。

(3) 私たちの王になるのを私たちは望んでいません

《一方、その国の人々は彼を憎んでいたの、彼の後に使者を送り、『この人が私たちの王になるのを、私たちは望んでいません』と伝えた。》

《その国の人々》とはユダヤ民族を表している。彼らは主を拒んだばかりか、主が出発されてからも(すなわち、昇天されてからも)、《あとから使いをやり、「この人に、私たちの王にはなってもらいたくありません」と言った》。この使者は、彼らが、(ステパノのように殉教した)主のしもべたちをどのように扱ったかを表しているとも考えられる。

(4) キリストのさばきの座で奉仕したことを評価される

《さて、彼は王位を授かって帰って来ると、金を与えておいたしもべたちを呼び出すように命じた。

彼らがどんな商売をしたかを知ろうと思ったのである。》

ここには、主がご自分の御国を打ち立てるために戻って来られることが表されている。それから主は、《金》を与えた者たちを扱われる。

恵みの時代の信者たちは、キリストのさばきの座で、自分が奉仕したことを評価される。それは、携拳の後、天で行われる。

患難時代にキリストをあかしする忠実な(ユダヤ人の)「残りの民(レムナント)」は、キリストが地上に再臨される時に評価される。ここでは、このさばきのことがおもに取り扱われているようである。

(5) 最初のしもべ**①あなた様の一ミナで十ミナをもうけました**

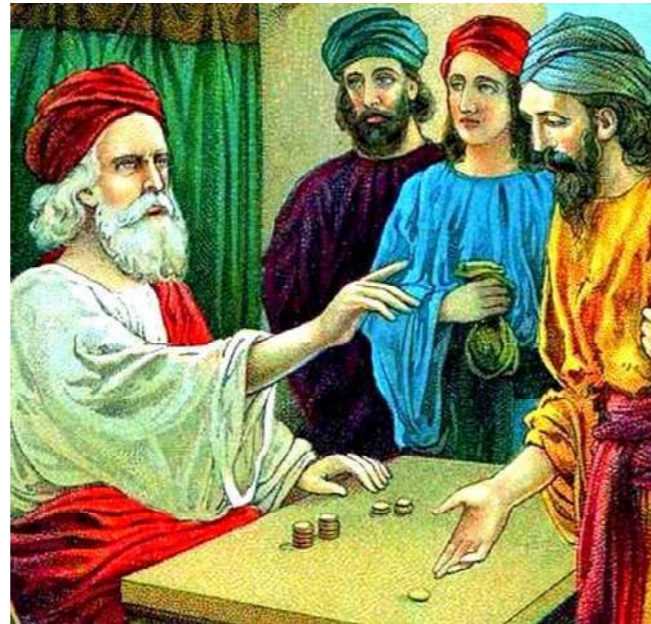
《最初のしもべが進み出て言った。『ご主人様、あなた様の一ミナで十ミナをもうけました。』》

《最初の》しもべは、自分に預けられた《1ミナ》で、すでに《10ミナ》をもうけていた。《あなた様の1ミナ》ということばからわかるように、彼はそのお金が自分のものでないことを自覚していた。彼は、自分の主人の利益になるよう、それを用いるに当たって最善を尽くしたのである。

②小さなことにも忠実だったから、十の町を支配する者になりなさい

《主人は彼に言った。『よくやった。良いしもべだ。おまえはほんの小さなことにも忠実だったから、十の町を支配する者になりなさい。』》

主人は、彼が《ほんの小さな事にも忠実だった》ことを賞賛した。「ほんの小さな事」とあることから、私たちは最善を尽くしたあとでも役に立たないしもべであることが思い出される。彼が受けた報いは《10の町を支配する》ことだった。忠実に奉仕したことに対する報いは、キリストの御国で支配することと関係があるようである。ある弟子がどれほどの範囲を支配するかは、その人の献身と自己犠牲の度合いによって決まる。

**(6) 二番目のしもべ**

《二番目のしもべが来て言った。『ご主人様、あなた様の一ミナで五ミナをもうけました。』主人は彼にも言った。

『おまえも五つの町を治めなさい。』》

《二番目》のしもべは、最初の《1ミナ》ですでに《5ミナ》をもうけていた。彼が受けた報いは《5つの町を治め》ることだった。

(7) 三番目のしもべ**①布に包んでしまっておきました**

《また別のしもべが来て言った。『ご主人様、ご覧ください。あなた様の一ミナがございます。私は布に包んで、しまっておきました。あなた様は預けなかったものを取り立て、蒔かなかったものを刈り取られる厳しい方ですから、怖かったのです。』》

三番目にやって来た者は、自分の言い訳ばかりした。彼は《風呂敷に》大切に《しまつて》おいた《1ミナ》を返した。彼はそれで何ももうけてはいなかった。そして、自らの怠惰を主人のせいにしている。

彼は(そのような行為によって) この身分の高い人を非難したのも同然だった。彼は、この主人は預けなかったものを取り立て、蒔かなかったものを刈り取られる《厳しい方》だと言った。

しかし、彼が主人のことをそんなに厳しい方だと信じていたなら、彼は風呂敷などに包んでおかずに、少しでも増えるように銀行に預けておくべきであった。

結局、彼の言葉は、言い訳なのである。自分の言い訳の言葉によってさばかれることになった。イエスは、このしもべが主人に関して言ったことを真実だとはお認めになられていない。

②維持ではなく活用することが求められていた

《主人はそのしもべに言った。『悪いしもべだ。私はおまえのことばによって、おまえをさばこう。おまえは、私が厳しい人間で、預けなかったものを取り立て、蒔かなかったものを刈り取ると、分かっていたというのか。』》

《それなら、どうして私の金を銀行に預けておかなかったのか。そうしておけば、私が帰って来たとき、それを利息と一緒に受け取れたのに。』》(23節)

風呂敷に包んでしまっておいたしもべに対し、主人が「もうけることはしなかったが、元手だけは残していたのだからよしとしてやろう」とは言われなかった。

23節の「銀行に預ける」とは、「(主のためにそれを用いることの出来る) 他のだれかに、それを譲るべきだ」ということであろう。主人はその元手を活用してもうけなさいと言われた。維持していることではなく、活用することが求められている。

(8) その一ミナをこの者から取り上げて、十ミナ持っている者に与えなさい

《そして、そばに立っていた者たちに言った。『その一ミナをこの者から取り上げて、十ミナ持っている者に与えなさい。』すると彼らは、『ご主人様、あの人はすでに十ミナ持っています』と言った。彼は言った。『おまえたちに言うが、だれでも持っている者はさらに与えられ、持っていない者からは、持っている物までも取り上げられるのだ。』》

①三番目のしもべに下したさばき

この主人が三番目のしもべに下したさばきは、《その1ミナを彼から取り上げて、10ミナ》をもうけた最初の人に与える、というものだった。与えられた機会を主のために用いないなら、それらは取り上げられてしまう。

ほんの小さなことにも忠実であれば、主に仕えるための(方法や手段)がさらに与えられる。この1ミナが、すでに《10ミナ》持っている人に与えられたのは不公平だ、と思う人もいるかもしれない。

②霊的な人生における不変の原則

しかし、「主を愛し、主に熱心に仕える人には、さらに広い範囲で仕える機会が与えられるようになる」というのは霊的な人生における不変の原則である。あらゆる機会を用いるようにしないと、すべてを失うという結果になる。

三番目のしもべは報酬をもらい損なったが、何かほかに罰を受けたとは明記されていない。彼が救われていたのは間違いのないようである。しかし、私たちキリスト者は救われたことで満足してはいけぬ。主からゆだねられているものを、主のために用いるよう全力を尽くさなければいけない。パウロもそのことについてこう教えている。

③救いではなく報いの問題

「私たちはみな、善であれ悪であれ、それぞれ肉体においてした行いに応じて報いを受けるために、キリストのさばきの座の前に現れなければならないのです。」(Ⅱコリント5:10)

それは、救われるか滅びるかということではない。私たちキリスト者は救われている。

しかし、「報い」が違うのである。

私たちが毎日生活する所、それがどこであっても、家庭でも職場でも学校でも教会でも、主は私たちがどれだけ忠実に、それを主のために活用しているかに目を留めておられることを知っておこう。

**(9) あの敵どもは私の目の前で打ち殺せ**

《またさらに、私が王になるのを望まなかったあの敵どもは、ここに連れて来て、私の目の前で打ち殺せ。』》

この身分の高い人を自分たちの支配者にしなかった国民は《敵》として扱われ、死刑の宣告を受けた。これはメシヤを拒んだ民のあわれな行く末を予告したものである。